

# 第八十四回六甲会（令和八年二月六日）

## 稲畑廣太郎選

兼題「春の霜・盆梅」その他当季雑詠

### 第一句会入選句

○朝光に大気の匂ひ春の霜  
晴天の明日を約し春の霜  
日の射してはかなく消ゆる春の霜  
盆梅の枝振愛でし翁かな  
玄関の盆梅にみる家風かな  
盆梅の尊き命輝きぬ  
盆梅や洋間を統べる雅の美  
陽光に綺羅透き通る春の霜  
○育ちゆく音を閉ぢ込め春の霜  
うつすらと春の霜置くすべり台  
春霜踏むパリ陥落の軍靴の音  
朝影の春霜のごと老の恋  
盆梅の幹の太さにある気品  
春の霜踏んで朝光纏ひけり  
山影に山気動かぬ春の霜  
盆梅の鉢を彩る小宇宙  
○盆梅や七八輪といふ見頃  
朝日あびとけて輝く春の霜  
盆梅に入れる鉢の音重し  
万物の夜明けはかなき春の霜  
盆梅の枝垂るる蕾日のにほひ  
丹精の花壇にくいき春の霜  
春の霜菜畑の青を滲ませて  
天帝の采配かとも春の霜  
盆梅を飾り暮しの弾みけり  
○春の霜女神のベールの落し物  
あけぼのや春の霜おく苔の庭  
春の霜とて逆らへぬ地の歩み  
春の霜はかなき命ひかりけり  
庭先に早も足跡春の霜  
地に下ろし盆梅力ほどこきけり  
盆梅展言葉貧しくなつてをり  
盆梅の老幹誇る香のこぼれ  
伊吹嶺の時つ風や春の霜  
春の霜しばむ葉先へ朝日影  
転車台回らぬ音の春の霜  
盆梅の大木となる汀子邸  
哀しみは哀しみのまま春の霜

石角節子  
松村咲子  
前出美千子  
前出公子  
河辺さち子  
奥田好子  
舩山美貴  
武本満子  
松村咲子  
田口ひさえ  
中本 宙  
中本 宙  
中本 宙  
石角節子  
奥田好子  
足立朱麻  
河辺さち子  
室田妙子  
鎌野光子  
石角節子  
一坪信舟  
田口ひさえ  
前出美千子  
田口ひさえ  
奥野千草  
前出美千子  
室田妙子  
平尾孝子  
池本準一  
徳永由起子  
藤田敦雄  
田邊育子  
森岡喜恵子  
平尾孝子  
山之口倫子  
田口ひさえ  
足立朱麻  
森岡喜恵子  
平尾孝子

盆梅展見得切る鉢の競ひをり  
○ドア開けて盆梅の香へ踏み入りぬ  
野の草の光まとひし春の霜  
盆梅の翳ふかく花かぐはしく  
盆梅の吐息風雅に大広間  
春の霜野辺に雀のむくろ抱く  
春の霜予報に忙し野良仕事  
朝の畑綺羅のベールや春の霜  
手放すときめし山家や春の霜  
盆梅に語る言葉が詩になる  
○盆梅の樹齢のくねり生氣満つ  
盆梅や生涯誠短かり  
盆梅の向きのそれぞれ日の加減  
○背丈越す盆梅にして浅き鉢  
春の霜はかなく消えて元の空  
白銀の館に盆梅てふ世界  
盆梅の動かぬ景色静心  
師の心届き盆梅庭に咲く  
盆梅の樹齢にありし気品かな  
書の軸を掛け盆梅の華やぎぬ  
○移り香や盆梅展を見て来しと  
太閤の縁長浜盆梅展  
盆梅に宿る時間をたづねけり  
盆梅の太き幹にもある息吹  
春の霜消ゆる元気な通学路  
盆梅の幾百年を語る秘話  
盆梅の古木の幹にある気品  
盆梅の幹の静謐裏表  
盆梅の黄金の蕊に寄す羽音  
漁火の灯れば里は春の霜  
盆梅のひと息届く畳の目  
なるほどと思ふ雅号の盆梅展  
古墳山村もろとも春の霜  
○春の霜野はプラチナの輝きに  
丹精を凝らし端整盆梅展  
菜を被ふベールは魔物春の霜  
立ちあがるあしたのジョーに春の霜  
世界観似たる盆梅さがしけり  
宇宙とは表現したる鉢の梅  
盆梅に漲る威風方五寸

田邊育子  
山村千恵子  
田邊育子  
池本準一  
奥田好子  
田邊育子  
河辺さち子  
舩山美貴  
中村澄子  
池本準一  
平尾孝子  
森岡喜恵子  
田口ひさえ  
長安悦子  
谷本房子  
金田八江子  
谷本房子  
金田八江子  
谷本房子  
長安悦子  
前田容宏  
山田佳音  
惠島祥一朗  
前出公子  
金田八江子  
芳林淳子  
室田妙子  
藤田敦雄  
山之口倫子  
大西美知子  
足立朱麻  
中本 宙  
藤田敦雄  
多田羅紀子  
多田羅紀子  
多田羅紀子  
岡本やすし  
岡本やすし  
岡本やすし  
前田容宏

農曆狂はすことも春の霜

奥野千草

盆梅や樹齡の由緒つまびらか

岩鼻絹子

○ひとしきり朝を奏でて春の霜

前田容宏

遮断機の下りて気付きし春の霜

林 曜子

草千里茫茫として春の霜

前田容宏

春の霜兆す数多の星澄めり

北井真有美

春の霜土塊となりたまゆらに

武本満子

○盆梅や束縛といふ時空の美

本郷桂子

明けきらぬ街こはばりて春の霜

足立朱麻

春の霜解けて日差しをこぼしけり

田附光映

◇ ◇

足立朱麻

老ゆるほど備ふ風格鉢の梅

小柴智子

(廣太郎先生出句)

高野さち

盆梅の丹精の日を花数に

玉手のり子

盆梅を大地に還し主逝く

高木雅惠

プランター皆うなだれて春の霜

高木雅惠

盆梅の枝の角度といふ気品

杉山千恵子

盆梅の一枝なりとも無駄のなく

杉山千恵子

聖母像足下彩る春の霜

酒井湧水

客足のなき書肆盆梅のずらり

酒井湧水

春の霜虚空に吸はれゆく仔細

藤井啓子

一枚の女神のヴェール春の霜

藤井啓子

春の霜大地の息吹閉ぢ込めて

高橋純子

盆梅展掌に乗るほどを買ひ求む

高橋純子

## 第二句会入選句

盆梅や蕾の数を秘めてをり

田中由子

○文机の盆梅にある一壺天

藤井啓子

春霜の音なくこはれゆくひかり

海輪久子

○新築を祝ぐ盆梅の置きどころ

田附光映

春の霜消ゆ朝の日に靄を立て

生澤瑛子

悼む人芦屋に偲び春の霜

平田 恵

大木の皮一枚の盆梅に

辻田あづき

天地の最後の試練春の霜

玉手のり子

盆梅や時折鍋の煮ゆる音

林 曜子

赤き花散る時の来て春の霜

辻田あづき

クロスワード解けてしとねの春の霜

平田 恵

一軸と百年の香の盆梅と

海輪久子

風格はまさに金賞盆梅展

北井真有美

盆梅の香り清しき順路かな

柄川武子

○神の手の育て盆梅てふ美学

玉手のり子

春の霜踏みて黒きに戻る土

槌橋眞美

盆梅の幹の太さが語る秘史

本郷桂子

春の霜いつしか玉の光なす

北井真有美

○星を見て祖父の直感春の霜

藤井啓子

○いちだんと甘き露地物春の霜

小柴智子

庭からの眺め田の景春の霜

加古直子

春の霜地霊の吐息かもしれず

玉手のり子

あけぼのの轍に光る春の霜

河合美恵子

星零すあしたは春の霜こぼす

田附光映

それぞれの宇宙持ち寄る盆梅展

杉山千恵子

盆梅の香がちりぢりに来て一つ

岩鼻絹子

盆梅の鉢にも継げる歴史あり

岩鼻絹子

土掴みある盆梅のこの気魄

海輪久子

○春の霜もののかたちに溶けはじめ

高野さち

園庭の元は盆梅てふ古木

酒井湧水

鳥の踏む水無川や春の霜

辻田あづき

○もの言ひたげな盆梅の香の真白

本郷桂子

歳月に削がれ盆梅気魂生る

高野さち

峡の日に終に萎えきし春の霜

本郷桂子

芳香の裏の声聞く盆梅展

奥山登志行

春の霜透き通りたる朝の日に

加古直子

遺構まだ発掘途上春の霜

杉山千恵子

春の霜一と足ごとに消ゆる夢

岩鼻絹子

春の霜それと指されて気づきたる

田中由子

汀子雛飾り面影飾りけり

生澤瑛子

盆梅や屏風に散らすいろは文字

生澤瑛子

盆梅にある正面や座を正す

藤井啓子

盆梅展ありて骨董市のあり

辻田あづき

盆梅の差し伸ぶる枝逞しく

高橋純子

春の霜光りて吉野汀子句碑

高橋純子

豊臣の居城でありし盆梅展

辻田あづき

盆梅の香に国宝の城の園

奥山登志行

○天帝の心の迷ひ春の霜

杉山千恵子

盆梅や一樹に華やげる三色

槌橋眞美

羽衣の光纏へる春の霜

高野さち

盆梅の齡百年香の新た

槌橋眞美

春の霜日曜ミサの鐘に消ゆ

林 曜子

春の霜時節の裏返る天意

奥山登志行

盆梅の匂ひに溺れるる会場

平田 恵

荒鋤の田にうつすらと春の霜

小柴智子

○地に下ろす盆梅の枷解くため

玉手のり子

春の霜とはあつけなく消ゆるもの

田附光映

◇ ◇

(廣太郎先生出句)

盆梅の香に応接間仕上りぬ

春の霜切り裂く君のピンヒール

苔むして盆梅樹齡重ねゆく

春の霜足裏に解けゆく氣息

盆梅の香に包まれてゆく棺

◎次回第85回六甲会は令和8年4月3日(金)開催です。

兼題 桜蔭降る・壺焼